

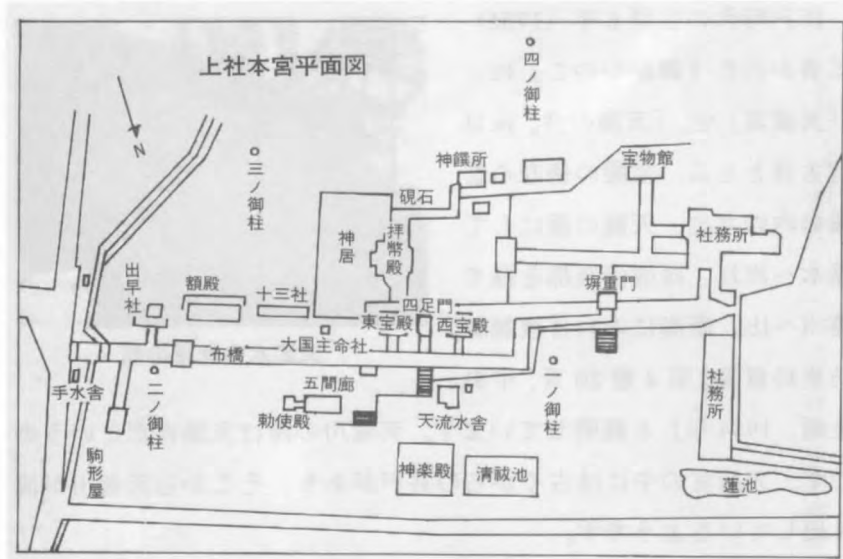
## 2 天竜川と諏訪大社

私たちの住む長野県を代表する川の一つが天竜川です。この天竜川は諏訪信仰と密接な関係を持っています。そして、諏訪信仰には日本人が水に対して抱いてきた意識が、実にきれいに現れます。

そこで、次にこのことについてお話ししましょう。



諏訪大社上社本宮



諏訪大社上社本宮平面配置図

## 【天流宮・天滴社】

諏訪大社上社本宮に天流宮（天滴社）というお宮がありますが、ご存じでしょうか。諏訪市博物館の側から本宮に行くと、鳥居を<sup>くぐ</sup>り、左手に雷電為右衛門の



諏訪大社上社本宮にある天流水舎

銅像があり、それを南西に進むと、勅使門<sup>ちよくしもん</sup>のすぐ下にあるお宮です。布橋の方から見ますと、不思議なことにその屋根には円い筒、あるいは煙突のようなものがつけられています。

江戸時代の宝暦6年（1756）に書かれた『諏訪かのこ』は、「天滴宮」を、「天滴の井。或は宮古井とも云。宝殿の傍なる宮殿の内の井也。天龍の源にして湖水へ流れ、同国伊奈郡を経て遠州へ出、南海に入」（『復刻諏訪史料叢書』第4巻20頁、中央



天流水舎屋根の筒

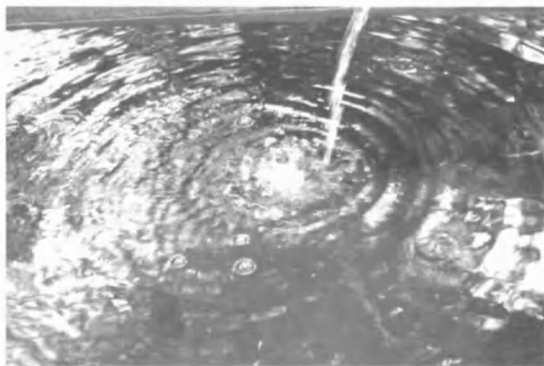
企画、1984年）と説明しています。天竜川の源は天滴宮だということです。天滴宮の中には古くからの井戸があり、そこから天竜川が流れ出しているようです。

『<sup>かつしやわ</sup>甲子夜話』（随筆。肥前平戸の藩主<sup>まつらせいざん</sup>松浦静山著。文政4年（1821）

11月17日甲子の夜より起稿。正統各100巻、後編78巻。大名・旗本の逸話、市井の風俗などの見聞を筆録。－『広辞苑』－では、「上の社に天竜の井と云あり。此下流即天竜川なり。此井に、一日に必ず三点づゝの雨降る」(『甲子夜話』第1巻53頁、平凡社、1977年)と、上社にある天竜の井戸が天竜川の源で、この井戸には1日に必ず3滴ずつの雨が落ちるとしています。天流宮の煙突のような形のものは、この3滴を受ける装置でしょうか。

寛政年中(1789～1801)に書かれた『<sup>すわし</sup>諏方誌』には、「社頭天滴水ハ、方ヲカコイ、中ニ石井有り、清水ヲタヽヘタリ、晴天ト云ヘトモ、時トシテ雨下ト云ヘリ、余流湖水ニ入テ以テ天流ノ名アリ」(『復刻諏訪史料叢書』第4巻81頁)とあります。四方を囲まれた中にある石の井戸に、晴天であっても雨が降り、井戸の余流が湖水に入るので、天流の名があるのだとしています。江戸時代の古文書などには、「天竜川」が「天流川」として記されることが多いのですが、これはこのような理由によるのでしょうか。天竜川は天から流れ下ってきた川だという意識です。

『信濃国今昔姿』(文政2年〔1819〕に乾水坊素雪が撰述)は、「天水 神前の北に有、此天水と申は、毎日晴雨に限らず、一日に三滴ツヽ天より天水下ると云。日本国中外になし。当社に限る也。世に唱る所の大天龍川の惣水上



水紋

なり。旱天の年は国々より当社へ願ひて、彼天水を迎へて降雨を祈るに、其験しなきと云事なし。わけて、近年は遠国より聞伝へて、天水を迎へ奉る人甚多し。降雨の後、倍水して返納するなり（此時雨井トモ言） 臺石 神前の西北に有、是七石の其一石也。池の様ニ而玉垣の内に有り。且又蓮池の中に天龍川上の社有之、今弁才天の社はなり」（『復刻諏訪史料叢書』第4巻107頁）と記しています。天水というのは、毎日晴雨に限らず1日3滴ずつ天より降るものだと思います。これは日本でもほかにはなく、諏訪社だけにあるのだそうです。これが天竜川の出発点だとします。日照りの年には国々からこの神社へ願い、天水を迎えて、雨乞いをするると必ず効験があります。そこで、近年は遠国より天水の効力を聞き伝えて、天水を迎えにやってくる人が大変多いようです。天水を借りた場合、雨が降った後に水を倍にして返すことになっていました。このように、天滴は天から直接降ってくるしずく雫であり、雨乞いに用いると絶大な効果を発する神聖な水として意識されていたのです。



光る水滴

『諏訪史蹟要項十一 諏訪市中洲篇』には、「天流水屋」が「文政十一年の建築で、如何なる晴天の日でも屋根の雨三滴が降り、水受けから水屋に入ると伝えられ、七不思議の一に数えられている。乾ばつの夏は各地よりこの水を貰い、竹筒に入れて持帰りその地に

撒けば降雨あつて効験あらたかなるものありと信じられていた」

（『諏訪史蹟要項 11 諏訪市中洲篇』33 頁、諏訪史談会、1956 年）  
と、これまでのものと同じ説明をされています。

昭和 8 年（1933）にできた杉村顕の『信州の口碑と伝説』には、  
「宝殿の点漏」として「諏訪神社の萱葺の宝殿から、毎日午の刻になると、きまつて雫が落ちるが、如何な晴天酷暑の日でも、更に絶えた事がない。地人はこれを社頭の雨と称してゐる」（杉村顕『信州の口碑と伝説』381 頁、長野郷土誌刊行会、1933 年）という伝説が採録されています。諏訪大社では御柱の時にいろいろな建物を造り替えていましたが、今は宝殿のみです。逆にいうと宝殿はそれだけ大事な建物ですが、そのすぐ東側に天流宮が位置します。この伝説では、宝殿から正午に決まって雫が落ちるとのことです。おそらくこれが天竜川の源となるとの意識があつたのでしょう。

このように、諏訪信仰の世界では天竜川の源になるのが天滴社からの水で、その水は天からの雫が集って流れ出す。このことによって天流川の名が出たのだと信じられていました。このように、諏訪信仰は天上から降る雨、水の信仰が色濃く意識されたものでした。

このことは、諏訪信仰の御神体の山とされる守屋山にも見られます。諏訪地方では守屋山に雲がか



凍った諏訪湖と守屋山

かると雨が降るとされます。雨乞いの時には守屋山山頂の石の祠が転がり落とされたこともあります（『諏訪大社』41 頁、信濃毎日新聞社、1980 年）。この山は水分<sup>みくまり</sup>信仰の山なのです。水分とは「水配<sup>みずくば</sup>りの意」で、山から流れ出る水が分かれるところをいいます。山から流れ落ちる水に対する信仰です。したがって、諏訪の神は水分神でもあるのです。

下諏訪町には尾掛<sup>おかけまつ</sup>松がありました。この松については神無月に神々が出雲大社に集まった時、諏訪明神の後の方が見えないので、尾はどこにあると聞かれて、尾は大和の尾掛松にと答えとの伝説もあります。また、「諏方大明神画詞」



枯れた尾掛松（下諏訪町）

では元寇の時に竜体の諏訪大明神が戦った話が出てきます。このように諏訪明神は竜の体をしているとの意識が一般的でした。竜は水のシンボルでもあります（『諏訪大社』166 頁）。

諏訪信仰にとって特別な意味を持



諏訪湖（高ボッチより）

ったのが諏訪湖です。諏訪湖は水のたまったものです。そこに竜が潜んでいると考えられたものでしょう。

水は、今では酸素と水素の化合物だとわかっていますが、長らく人間の作り出せるものではありませんでした。水は天からの恵みであり、

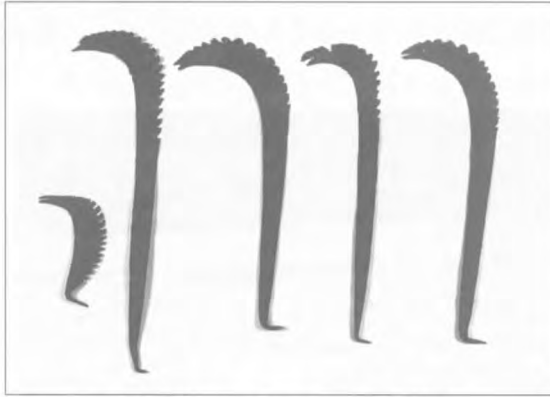


諏訪大社上社布橋入口門の竜

司っているのは神様だと信じてきたのです。ですから、人間の周囲をめぐる水に対する理解としては、神のいる天上から落ちる雨、そうして生まれた水を集める沼や湖、それが流れて集まる川。さらに大地から、川から、海から立ち上がる水蒸気が、雲となり、再び雨となる。こうしたことをすべて司っているのが神様だとされたのです。竜体である諏訪の神もその代表だったのです。

いったん落ちた雨が水蒸気となって天に上がる時に大事なものは風でした。諏訪の神の形だとされる竜は、水の中と天空を行き来できます。それ自体が地上と天空をつなぐうるのです。しかし、水蒸気を天空に押し上げる役割で大事だったのは風だと考えられていました。実は諏訪信仰のもう一つ重要な要素が風だったのです。

諏訪信仰は風を切るなぎかま薙鎌でも有名です（『諏訪大社』169頁）。『日本書紀』によれば、持統天皇5年（691）に朝廷が使者を派遣して、竜田の風神、信濃須波・すゐ水内等みのちの神を祀らせています（『信濃史料』）



健御名方富命彦別神社の薙鎌  
(飯山市教育委員会提供)

第2巻57頁)が、これは風神への奉幣<sup>ほうへい</sup>ですから、諏訪の神は風の神でもあったのです。ここに私は、天空から雨となって落ちる水、それを再び天空に押し戻す風と、循環する水の論

理を神々に託した、日本人の意識を感じます。

諏訪社に見られる水の信仰、とりわけ水分信仰は決して特別なものではありませんでした。私は飯山市小菅<sup>こすげ</sup>というところへ度々出かけていますが、ここは戦国時代に飯縄<sup>いひづな</sup>・戸隠<sup>とがくし</sup>と並ぶ信濃の聖地でした。この小菅信仰の中心をなすのが奥社ですが、本殿の内陣向かって右の間は、宮殿が置かれていない空間があります。真っ暗な奥に、岩間から漏れる清泉を湛えた甘露池<sup>かんろいけ</sup>と称する小池があります。ここでかつては、

本尊である馬頭観音<sup>ごま</sup>の護摩を勤行したようです。伝承では、昔弘法大師が参詣してこの宝池の水を味わったところ甘露の味がした。そこで甘露



小菅神社奥社



池と名付け、祭壇を設けたのにはじまると伝えています。この水も旱魃の時には雨乞いに使われました（笹本正治『飯山風土記—信濃の宝石「いいやま」—』138頁、（財）飯山市振興公社、2003年）。

ここも高い山の岩の間から流れ出る水が、信仰の対象だったのです。

このほか、戸隠信仰も全く同様の性格を持っています（戸隠総合学術調査実行委員会『戸隠 総合学術調査報告』、信濃毎日新聞社、1971年）。松本近辺では高ボッチ高原の山頂にある祠も、同じように水分信仰から来ています。

諏訪社は中世信濃の一宮でしたが、その信仰は多くの人



戸隠神社と岩肌（長野市）



高ボッチ高原にある祠（水分信仰）

にわかる自然に対する敬虔な気持ち<sup>けいけん</sup>から出ていたものだったのです。とりわけ水に対する信仰がその基底にあったことは大事です。